

研究代表者	所属機関	中央大学 文学部		2011年度助成額
	氏名	高橋 慎也		3,554 (千円)
	NAME	Shinya Takahashi		
研究 課題名	和文 英文	現代日本文学作品の国内・国外評価の比較研究 The Comparative Study of The Reception of Modern Japanese Literature Abroad	研究 期間	2010年度 ～2011年度

1. 研究組織

	研究代表者及び研究分担者		役割分担	備考
	氏名	所属機関/部局/職		
1	高橋 慎也	中央大学・文学部・教授	ドイツ語圏における文学作品評価研究	研究代表者
2	兵藤 宗吉	中央大学・文学部・教授	フランス語圏における文学作品評価研究	研究分担者
3	中尾 秀博	中央大学・文学部・教授	英語圏における文学作品評価研究	研究分担者
4	宇佐美 毅	中央大学・文学部・教授	日本における文学作品評価研究	研究分担者
5	丹治 竜郎	中央大学・文学部・教授	英語圏における文学作品評価研究	研究分担者
6	Arokay, Judit	ハイデルベルグ大学・日本学研究所・教授	ドイツ語圏における文学作品評価研究	研究分担者
7				
8				
9				
10				
合計		6 名		

2. 研究の概要（背景・目的・研究計画・内容及び成果 和文 1000 字程度、英文 100word 程度）

（和文）

2011 年度は米国とオーストラリアでの海外調査を実施した。また両国の有力大学の日本文学研究者に訪問インタビューを行い、研究者のネットワークを形成した。同時に昨年度からの米国、イギリス、オーストラリア、ドイツ、フランスの受容状況研究を継続した。英独仏語の翻訳傾向については、翻訳作品データベースと新聞批評データベースを用いて研究を進めた。書評文の認知論的分析も試行した。さらに本研究に関係する作家（多和田葉子さんと北爪満喜さん）、翻訳者（パトリック・オノレ氏）を招いた公開セミナー、および学内共同研究発表会「異文化接触と文学言語の創造」を開催し、学生・教員・学外者に対して研究成果の還元を行った。

ニューヨーク、シドニー、メルボルンの大型書店、文学専門書店、公共図書館、大学図書館での書棚調査と書店員への聞き取り調査、またコロンビア大学、シドニー大学など有力大学の日本文学研究者に聞き取り調査を行い、日本文学の販売状況、書店での人気度、購買客層、翻訳動向と教育状況について情報収集し分析した。その結果、米国とオーストラリアでの受容はフランス、ドイツよりも弱いという意外な事実を発見した。調査各国の研究者、翻訳家、書店員からの情報に基づき、その原因は非英語圏諸国の日本文学受容の歴史的集積および他の文化ジャンル（コミックやアニメ）の広範な受容にあるという結論を得た。また英独仏米濠の翻訳出版の傾向分析と編集者への聞き取り調査からは、純文学から娯楽文学への翻訳シフトが進んでいることが確認できた。英独仏米濠の大学の日本学専攻では、学生の純文学への関心が低下し、日本の映画やポップカルチャーを教材としたカルチュラル・スタディーズ研究・教育へのシフトが進んでいることも確認した。

翻訳データベースと書評データベースの分析からは、欧米における純文学の翻訳がピークを迎えたのは 1980 年代であり、その後は停滞していることが明らかになった。また翻訳される作家の性別が 1980 年代以降に男性作家から女性作家に転換し、1990 年代以降は現代の女性作家（小川洋子、吉本ばなな、多和田葉子、桐野夏生など）の割合が増えているのに対し、男性作家の翻訳については若返りが遅れていることも明らかになった。書評データベースの調査からは現代日本文学の作家の中で、英米独仏濠の各国すべてで新聞書評の対象となるのは村上春樹だけであることが判明した。また欧米圏におけるソフトパワーとしての日本現代文学は、現代女性作家によって減少が食い止められていることが数値データとして明らかとなった。

ここ 2 年間の本研究は主として大量のデータの分析、理論形成の試行、現地調査であったので、研究成果の多くは次年度以降に論文および学内研究発表会として公表される予定である。

（英文） In 2011 we researched mainly the reception of Japanese literature in the USA and Australia. Through the research, we discovered the unexpected fact that the reception in these two countries is not so active as in France or Germany. Also in some universities, the research and education of Japanese cultures has been shifted from the field of literature to that of film or pop culture. Through the analysis of the translation database, we discovered the change of popularity from men's to women's literature since 1980s. We traced that the power of the Japanese literature as soft power has been borne by the woman writers. We also invited the writers and the translators as a guest speaker, which contributed to raising the interest of the students to the theme of this research.

3. おもな発表論文等（予定を含む）

<p>【学術論文】（著者名、論文題目、誌名、査読の有無、巻号、頁、発行年月）</p>
<p>○ 高橋慎也、ドイツ語圏における現代日本文学の受容の傾向分析、ドイツ文化（中央大学）、なし、68号、2013年3月(予定)</p>
<p>○ 高橋慎也、紀要（中央大学）、欧米各国における現代日本文学受容史の変遷、なし、111号、2013年3月（予定）</p>
<p>○ 高橋慎也、マルターラー演劇の「孤独」のモチーフとパフォーマンス性、ドイツ文化（中央大学）、なし、67号、29～32頁、2012年3月</p>
<p>○ 兵藤宗吉、マレーシア国サラワク州における多民族青年・成人の自伝的記憶に関する研究（2）、教育学論集（中央大学）、なし、54集、49～64頁、2012年3月</p>
<p>○ 宇佐美毅、講演録「教室で『舞姫』を読むために」、紀要（中央大学）、なし、通巻239号、15～25頁、2012年3月</p>
<p>○ 宇佐美毅、テレビドラマにおける「変身」考、F（えふ）、現代文化研究会、なし、10号、191～221頁、2012年5月17日</p>
<p>○ 丹治竜郎、精読によって制毒は可能か？ — Kazuo Ishiguro の”A Family Supper”と曖昧性の罫 — 、紀要（中央大学）、なし、110号、23～38頁、2012年3月</p>
<p>【学会発表】（発表者名、発表題目、学会名、開催地、開催年月）</p>
<p>○ 高橋慎也、マルターラーの音楽劇における哀悼、日本演劇学会、早稲田大学（東京）、2011年12月4日</p>
<p>○ 高橋慎也、Performativity in Toshiki Okada’s postdramatic ‘Globalisation Theatre’（岡田利規のグローバル演劇におけるパフォーマンス性） 国際演劇学会、大阪大学（大阪）、2011年8月</p>
<p>○ 高橋慎也、Theaterraum als Installationsraum vom phänomenalen Leib und semiotischen Körper（現象学的肉体と記号論的身体のインスタレーション空間としての演劇空間）、 Gesellschaft für Japanforschung、チューリヒ大学、2012年8月（予定）</p>
<p>○ 兵藤宗吉（共同発表）、事後情報の再生が後のモニタリングに及ぼす影響、日本認知心理学会、学習院大学（東京）、2011年5月</p>
<p>○ 兵藤宗吉（共同発表）、教示内容がモニタリングに及ぼす影響、日本心理学会、日本大学（東京）、2011年9月</p>
<p>○ 中尾秀博、Indigenous Triptych of 1912、Pacific Solutins、バルセロナ大学、2011年12月</p>
<p>○ 宇佐美毅、村上春樹・危機の時代と小説家の〈責任〉、東京私立中学高等学校協会・文系教科研究会（国語）、私学会館（東京）、2011年</p>

○ Árokay, Judit, „Schriftsysteme im frühen Japan. Kreative Möglichkeiten der Differenz“. (日本古典文学における書記システム—差異の創造的可能性) – In: Sybille Krämer, Eva Cancik - Kirschbaum, Rainer Trotzke (Hg.), Schriftbildlichkeit: Wahrnehmbarkeit, Materialität und Operativität von Notationen. Berlin: Akademie Verlag 2012

○ Árokay, Judit: „Muster der Selbstbeschreibung. Japanische Autobiographien zwischen Tradition und Moderne“. (自己記述のモデル。日本の伝統と近代の間における自伝文学) – In: Claudia Ulbrich,

【図 書】 (著者名、出版社名、書名、刊行年)

○ 宇佐美毅 (共編著)、おうふう、村上春樹と一九九〇年代、2012年5月

○ 宇佐美毅 (単著)、中央大学出版部、テレビドラマを学問する、2012年7月(予定)

○ Árokay, Judit (共著)、Akademie Verlag, „Schriftbildlichkeit: Wahrnehmbarkeit, Materialität und Operativität von Notationen „ (文字の画像性)、所有論文: „Schriftsysteme im frühen Japan. Kreative Möglichkeiten der Differenz“. (日本古典文学における書記システム—差異の創造的可能性)、2012年

○ Árokay, Judit (単著)、Iudicium、Die Erneuerung der poetischen Sprache: Poetologische und sprachtheoretische Diskurse der späten Edo-Zeit. (文学言語の革新 江戸後期の詩学と修辞学の言説)、2011年.

【その他】 (知的財産権、ニュースリリース等)

学内共同研究発表会: 「異文化接触と文学言語の創造 I」 (2012年1月11日)

学内共同研究発表会: 「異文化接触と文学言語の創造 II」 (2012年10月1日、予定)